



海外

稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

会長メッセージ

今年初め、20年ぶりにイランの地を踏み、拠点長として駐在しています。イラン・イスラム共和国。日本の約4.5倍の国土に約7700万人の人口、平均年齢30歳そこそこ、天然・観光資源に恵まれ、石油関連、鉱山開発、自動車産業等、中東地域でも例を見ぬ産業基盤が整っている、極めてPotentialityの高い国です。

世間的には「悪の枢軸」などと悪口を言われていますが、実際は全く逆で、長幼の序を重んじ、あいさつを大切にす、親しみやすい国民性を

もっています。1979年の革命以後、30余年にわたり経済制裁を受け続け厳しい環境にありますが、名うてのペルシャ人(商人)は、そんなことではへこたれぬしぶとい面も持ち合わせています。

制裁下故に邦人の数も少なく、必然、稲門会の規模も小ぶりになってはいますが、会員全員が一致団結して、今後も「テヘラン稲門会」を盛り上げていく所存ですので、校友の皆さまからも応援いただければ幸いです。

小林 哲(1982年社学)

会員からのメッセージ

2001年からの5年間に続き、今年4月から現法社長として、テヘランに駐在しています。イランは、長い歴史と奥深い文化をもち、人口約8000万人、天然ガス・原油埋蔵量世界1位という大国であり、不安定なこの地域において、

その存在感が増しています。そのイランにとって、日本は重要なパートナーになれる立場にあり、私たち稲門会メンバーがその誇りをもって、日本とイランの架け橋となるべく取り組むことが、両国のさらなる関係強化につながると思っています。

稲田和男
(副会長、1985年理工機械、87年工研修)

海外で「都の西北」を合唱する機会があるとは、学生時代には想像もできませんでした。2010年から2012年はサンパウロ稲門会で相田会長ほか皆さんにお世話になり、早慶戦(野球、テニス、ゴルフ)にも参加しました。今度はテヘラン着任早々に小林会長からご連絡をいただき、早速テヘラン稲門会の会合で校歌と「紺碧の空」を大合唱しました。

危険なイメージをおもちの方が多くはありますが、テヘランの治安は安定しており、四季もあり(冬は雪が降るんです!)、まさに住めば都(ちょっと褒め過ぎ?)。日本から遠く離れたこ

の地で、小林会長以下皆で稲門会を盛り上げていきたいと思えます。

平山公士(1991年理工建築)

テヘランの魅力はなんととっても美しい山並みではないでしょうか。四季があり、冬には雪化粧、パウダースノーでスキーができる、というのは中東≒砂漠のイメージからは驚きでしょう!

きちんと芝(草?)の生えた13ホール!のゴルフ場もあるんです。週末には「暇な日本人」が集まって草刈りにいそしんでいます。ゴルフにスキー、まさに大学時代にサークル「早大NS」で謳歌した青春を思い出すような余暇を過ごしています!!

山口隆広(1995年商学)

テヘランに来て2カ月、初めて自分の用事が入り、とてもうれしく感じたのが稲門会の集まりでした。早大卒業後に医学部に進み、医師としてフルで働いてきた私にとって、今は人生の休暇のようです。2人の子どもが学校に行っている間、昼寝もできるのです!

子どもたちは学校で、英語、ドイツ語、ペルシャ語を同時にスタートする状況にも臆せず、放課後は、昨年12月に30年ぶりにオープンしたスケートリンクでフィギュアスケートの練習に励んでいます。レジャーの少ないテヘランで、テニス、ゴルフ、スキーなど(マーじゃん)家族で楽しもうと思っています。

和南城(旭沢) 静(1996年商学)

テヘラン稲門会について



設立は2011年10月、登録会員は27人(2014年11月現在)。企業駐在員、学生、主婦にちびっ子たちも交え、BBQや食事会などアットホームな会合を続けています。今年7月には三田会(慶應)と初の懇親会も開きました。近年は、対イラン制裁で商取引が制限されているために留邦人が減り、会合の出席者も限られています。厳しい状況ですが、「すぐりし精鋭」たちは闘志を燃やし、「久遠の理想」を胸に絆を深めています。

田中龍士(幹事長、2002年政経)

イランの魅力

「イランの魅力」といえば、ペルセポリスに代表される歴史的な遺跡や、エスファハーンのようなエキゾチックな街並み、どこの家庭にも敷かれているペルシャじゅうたんのぬくもり……。けれどもイランをエキサイティングな土地にしているのは、やはり人びと。日本人というだけで一目を置いてくれ友好的に接してくれる割に、二言目には「アケメネス帝国の時代には……」と古代文明の偉大さやペルシャ文学の美しさをもって対抗してくるという、誇り高くもチャーミングな人びとであふれているのです。

日本人の遠慮やお世辞に通じるところのある「ターロフ」と呼ばれる社交辞令は、ただでさえ口数の多いイラン人たちがますます冗舌をしています。負けず嫌いでメンツを重んじる人びとの間では口論になることもありますが、その割にはわかりやすい性格の持ち主が多いため、それまでのイライラもどこへやら、結局は憎めないイランの人びとに思わず魅了されてしまうのです。

乗松彩奈(2003年社学)



- 1.エスファハーンのイマーム広場
- 2.古代遺跡ペルセポリス
- 3.魅力あふれるイランの人びと

